

## 明石の史跡（54）寛文の災害



藩政時代の明石を襲った災害のなかで、寛文10年（1670）8月23日の大風雨は、被害の実情が幕府に報告され、幕府の記録に次のように記載されている（厳有院殿御実紀同年9月3日条／徳川実紀5）。

○（上略）松平日向守信之所領播州明石。この八月廿三日大風雨にて。本丸二三の丸破損し。櫓。多門。そのほか土屋五百軒。商屋七十八。浦民の家三百七十一潰れ。男女十一人死し。船百九十二艘損じたるよし注進す。（下略）

築50年を経過した城内の主要建造物をはじめ、武士の家屋500軒、商家78軒、漁民の家371軒が倒壊し、さらに損壊した船192艘を数える。

被害の実情を、「播州明石記録」を参考にすると、13年後の天和3年（1683）の惣町中の宅数は1,389軒。商家78軒というのは、家の規模が不詳とはいえ、大がつくほどの被害とは思えない。船数304艘（うち145艘は50石積）のうち192艘に何らかの損害が確認できるのであるから、これは高潮の被害を考慮に入れる余地があるかもしれない。

それにしても武士の家屋の被害が、500軒という数字は、おどろきである。原因を何に求めたらよいのだろうか。災害時の藩主（松平信之）は第6代目である。周知のように転封にさいしては、家臣一同、家財道具などは、移転先へ送るか、または当地で処分することが考えられる。しかし家屋は移動させることは出来ない。そうすると築城の完成時に、城下町も体裁を整えたはずで、大小の屋敷も、城と同じく築50年ということになる。老朽化は否定できないだろう。

同じ日、須磨地方も大風に見舞われ、民家16軒が「吹きつぶ」されている（元禄・享保年代記／神戸市文献史料1.259頁）。やはり予想を超える「大風」が、災害の元凶に指名しても差し支えはないだろうか。